

## 未曾有の東日本大震災に学ぶ

〜天と地と人と一切円満大調和を目指す〜

まずもって、この度の震災で被災された方々、また大切なお身内を亡くされた方々のご冥福を、衷心よりお悔やみ申し上げます。

同じ人間として、同じ日本人として、遺された私達は、この震災から何を学び、何を為さなければいけないのでしょうか？もし今、この瞬間に、大地震が襲いかかってきたら…：大津波が来たら…：私達はいかに非力なのでしょう…。「ハア…」考えただけで溜息が出てきます。私には頭では分かっていたつもりでしたが、今回の震災で改めて、**自然の中**で生かされている**人間**なんだなあ…。もつと自然に感謝し、《自然と共生する（傲慢）》ではなくて、《自然様に共生させて頂く（謙虚）》のような素直な気持ちで生きなければいけないよなあ…と、つくづく思い知らされました。そう思えた時に、たった今パソコンの前でこの文章を打

ち込んでいる瞬間も、このハンド仏句を読んでいただいている檀信徒の皆さんの現在の、何の災害も無い、当たり前だと思っていたこの生活が、心より有り難く思えてきます。

私達には何ができるのでしようか？私には、今できる事を精一杯行う事以外に、被災された方々へ報いる事が出来ないのではないかと思います。この世の中に「当たり前」というものは何もありません。「当たり前」と思った瞬間に、「感謝心」が消えてしまいます。どうかどうか今こそ、傲慢な気持ちを抑え、かつて世界中の人達に、日本人は素晴らしいと賞賛された、謙虚であり、質素で儉約をし、勤勉素直という、あの頃の素晴らしい精神文化を呼び起こし、原点復帰しようではありませんか。全ては天地自然（神仏様）から、いま生かされている私達に与えられた試練課題である様に思います。天地自然へ、神仏様に対して、私達が出さねばならぬ答えは、「自分さえ良ければそれで良い」というのではなく、また家族さえ安穏無事なら、周囲で何が起きようが知ったこっちゃない等々の

小さな個人主義的幸福からキツパリお別れをして、家族単位から市町村へ、そして日本国家へと、異体同心の輪を広げていき、皆で協力一致して、精一杯生きる事の中にこそ、最高にして最大永遠の幸福があるという事を、体感実践していく事ではないでしょうか。

日本人の精神文化は、世界の最高峰であると確信しております。どうか皆で国家の再建と同時に、日本精神の再建を目指し精進してまいりましょう。

国家日本に対する誇りと、祖先に対する感謝の気持ちを持っていない人間は、心の柱を備えていない様なもの。船で海上を航海しているのに羅針盤を備えていないようなものでしょう。そんな人が立派な人間になれるとは思えません。行き先という目標も志もないのに、どうやって人生という荒波を超えていく事が出来るのでしょうか？勢いと思いつきだけで生きていけるほど、この世の中は甘くはありませんよね。

愛国心とは、日本の国土を愛する心の事です。日本国の歴史に対する誇りを持つ事で愛国心というものが生まれます。振り返れば、日本では太平洋戦争が勃発しました。東京裁判終了後、

相手国の大将であるマッカーサーは、日本の戦争は侵略戦争ではなく、自衛戦争だったと公言しています。なぜ日本が侵略国と言われなければならないのかからといって、マッカーサー自身がアメリカの上院議員特別委員会で次の言葉で宣誓しました…：“

**Their purpose, therefore, in going to war was largely dictated by security (彼らが戦争に突入した主たる動機は、自衛の為だった)”**と。


日本を恥ずかしいと思いついでいる学生や若者が大半を占める日本の現状がありますが、何も後ろめたい事はありません。世界中の人達が賞賛した日本の歴史や精神文化を、私達は今こそ心の柱として、胸を張り、謙虚で素直な日本人に戻らねばならないのではないのでしょうか？近年私達は「地球に優しい」とか

「環境に優しい」といった名文句で商品を買っていました。考えればこれも傲慢心の表れでした。私は逆ではないかと思えます。地球の生命が人類に優しいんですね。地球はもう四六億年も前からあって、人類が出てきたのは約一七万年前と言われます。地球の生命に比べれば、ごくごく最近出てきた人類が、四六億年も前からいる地球に優しくしてあげましょうというのが傲慢ではないでしょうか？我々人類が世界の富を全部集めても、世界の学者が全員集まっても、細胞一個作れません。なぜでしょうか？それは細胞が生きる為の最も基本的な事について、何も知らないんです。材料についてはかなり解明されているのですが、材料をいくら掻き集めても生き物は生まれてきません。生き物は部品の集まりではありません。生きた細胞と死んだ細胞。両者を測定してみても、物質量には変化は見られません。しかし明らかに生と死は違います。では何が違うのか？そこが分からないのです。これはただ事ではありません。我々の体には六十兆の生き物である細胞が寄り合っています。六

十兆というのは、地球人口六八億の約九千倍です。それだけの生き物が私達の体の中に寄り合いながら、なぜ細胞同士の戦争が起こらないのか、イジメが無いのでしょうか？実に見事です。細胞は自分のコピーをもの凄く勢いで作っています。それだけではなく細胞は自分が働きながら他の細胞を助けているから、臓器が働く事が出来るのです。臓器も自分の働きをしながら、他の臓器を助けている。なぜ自分の役割を演じながら、更に全体の為に利他の精神を発揮できるのでしょうか？お釈迦様が説かれた慈悲、イエス・キリストの愛とか、聖徳太子の和の精神とか、宗教的大天才が直感で掴まれた真理は、まさに日本人が当たり前の様に持っていた精神文化そのものだったのではないかと思っています。草花にも命があり、事物にも全て命があるとした八百万の神の国日本の精神文化が、自然と共生している事を実感として最も分かっていた民族だったのではないかと思っています。この度の大災害を受けて、私達に何が出来るのでしょうか？八百万（やおよろず）の神仏に対して「祈る事しかできない」ではなく、「祈る事ができる」の

です。どうか今こそ、天と地と人と一切円満大調和を目指し、この人生を全うしていきましよう。最後に一日も早い復興を祈念申し上げます。

再 拜 副住職 谷川寛敬



立教開宗とは  
りつきょうかいしゅう

日蓮聖人は千葉の小湊でお生まれになり御歳十六歳の時、生家から程近い清澄寺で出家得度なさいました。以来二十年の間、お釈迦様の御本意を知るため、鎌倉の諸大寺、奈良、京都、三井園城寺、比叡山延暦寺と求道の旅を続けられた聖人は、清澄に帰られた建長五年（一二五三）、四月二八日早朝、昇り来る旭日に向ってお題目を始唱なさいました。これを立教開宗といえます。立教の宣言と伝道の誓願をお立てになられ、是聖房蓮長を改め、日蓮と名乗られたのです。

立教開宗とは「法華經」の教えに立つて法華宗を開いたことをいうと思われていますが、本来の意味は法華經の教えに依って「宗旨」である三大秘法のお題目を開き顕わしたことをいうのです。聖人はお釈迦様の御本意である法華經でお題目の中身を開き顕わされ、そのお題目で一切衆生を救済しようと決意、宣言なされたのです。それまでは求道者でありましたが、その日を境に衆生の救済者となられたのです。その思いを後ほど佐渡に渡られ、お書きになられた『開目鈔』の中で『我日本の柱とならむ、我日本の眼目（がんもく）とならむ、我日本の大船（たいせん）とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず。』と仰っておられます。

このときの「願」こそが、この『立教開宗』への思いであり、その内容とは「私は日本を護る主人（柱）になろう、日本の将来を見通す師匠（眼目）になろう、日本の衆生を救う親（大船）になろう」という三大誓願なのです。

